

- 1 派遣期日 令和5年 8月8日(火)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3丁目29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

3 研修内容

- (1) 視察校の取り組みから、これからの国語授業の在り方を学ぶ

研究主題:子どもと創る言葉の学び

「個別最適な学び」と「協働的な学び」が充実する国語授業

今回実施された授業研究会では、「子どもと創る」を大きなキーワードとして、子どもが自分の学びのスタイルを、自分の特性に応じてできるようにすることを目指した国語授業の研究を行っている。子どもと創るとは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が充実することにつながると考え、「子どもと共に学びの空間を創る」という視点で授業を提案している。

①個別最適な学びと協働的な学びについて

子どもが自分で追究するときには、必ず足場になる道具や材料をもっていないといけないため、教師が教える場面、一人で深めて創意工夫を発見していく場面、学びを深めた後に同じように学んできた友達と一緒に相互に吟味する場面の3つの学びが大事になる。さらに、個別→協働→個別と往還することで、個の学びだけでは分からなかった考えを発見したり、それを活用して自分らしく創造したりすることができる。

○発達段階に応じた授業づくり

低学年は、物語文や説明文、詩や短歌などの読み方や書き方、考え方を教える。一人ひとりの考えをもたせ、「失敗や間違い」の経験をたくさん積むようにしている。その失敗を次の単元に生かすことができるように授業をつくる。高学年は、毎時間教師が仕切るのではなく、最後のゴールを見据えて、そこを目指すまでの時間はどんなふうになんかやってみようかということを通して過去の経験を使って考えさせる。その際に、教師は、子どもは今何を活動としてやろうとしているのか、それについてどんなことで悩み判断しているのか、というのを見守る。それと同時に、教師は具体的に称賛したり、さらによくなるように適切に助言をしたりするなど、価値付けをしていく。このように、学年が上がるにつれて、子どもに委ねる時間が増えていく。

○「読むこと」の授業において

「読み合うために読み直す」授業に加えて、「表現するために(書くために)読み直す」という個や協働の「学びの必然性」が伴う単元や授業を組織する。

○「書くこと」の授業において

言葉そのものが学びの対象のため、「打つ」も併用している。子どもは、手書きとコンピュータのやり方を選ぶ。アウトプットする際に、書いている作品や文章を子どもがどれだけ考えてどんな風に考えが変わってきたかを振り返らせる。

②子どもと共に創る授業

教師と子どものやりとりの中で子どもに「問い」をもたせ、「学びの必然性」がある授業を実践し、単元を通して取り組んでいる。子どもがなぜそれをやらなければいけないか、それを解決するにはどうしたらよいか、など自ら考える力を養う。「今度の単元はこんなお話だよ。前にはこんなお話読んだね」と情報を開示していくなど、単元、年間指導計画、系統で考えることで子どもに学びたいという意欲をもたせる。

○学びの必然性と問いのもたせ方

説明文:文章と出会うときに、「書かれている内容を知りたい」という思いをもって読めるような読む目的をもたせる。そのために生活経験と関連付けて、教材とであわせる。問いが解けるヒントを散らばせておいて、子どもが「問い」をもったら学習課題を提示する。

(2) 授業を参観して

【授業実践の例】

① 3学年 国語科「マイ詩集をつくろう」

マイ詩集として、お気に入りの詩のアンソロジーをつくる学習である。単元のゴールにアンソロジーを紹介し合うことを設定しているため、見通しをもって主体的に学習に取り組めるようになっていた。詩「きまっただぜ」を提示する際に、題名と作者を隠し、子どもに「問い」をもたせていた。詩の表現を少しずつ提示する中で、続きの表現を想像して表現したり表現技法を確認したりする場面では、子どもが発言したことに対して、「どういうことか分かりますか」と全体に問い返し、子どもの言葉でつなぎ、理解を深めていた。想像して表現する楽しさにふれた上で、詩のリライトに関する学習課題を設定していた。動作化して音読をすることで、時、場、出来事への理解を深め、表現技法に気付かせていた。考えのゆさぶりとして、教師と ChatGPT によるバッドモデルを2つ提示し、それを指摘して改善案を出し合うことでより適切なリライトができるようにしていた。2つ提示することで、「語尾や音数」と「時」を意識させていた。リライトする場面では、マインドマップでレベルを提示することで、自分に最適な学び方を選んで創作できるようにしていた。創作した作品を全体で音読し、音数や語尾に気付かせ、表現を練り直すという「個別最適な学び」と「協働的な学び」が充実した授業だった。



② 2学年 国語科「うちの近くの名人、はっけん」

説明文の学習である。生活科の町探検で「家の回りの名人を探し、その仕事を紹介しよう」と各自、調査をしている。名人の仕事を説明するために、「どうぶつ園のじゅうい」で真似できそうなところを見つけることを関連付けていたことで、「学びの必然性」がある授業だった。教科書と資料映像とを比べる際に、教科書との違いをつぶやいていたときに、教師が「もう比べているね」と言いながら、課題を提示していた。子どもが自ら学習を進めていくしかけをしたことで、子どもの主体的な姿が見られた。共通点と相違点を話し合い、なぜ資料映像と教科書に違いがあるのかという「問い」に対して、発言した子どもの言葉を他の子どもの言葉で言い換えていくことで、事例は筆者の意図により選択されていることに気付かせていた。時計を掲示し、その周りに仕事内容と段落番号を板書することで、時間的な順序に即して内容が述べられていることを理解させていた。教師が「証拠は？」と発問することで、叙述をもとに読み取ることができるように意識させていた。



4 感想

本研修を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が充実する授業について考えることができた。私はこれまで、協働的な学びとは、ペアやグループ学習などの学習形態を協働的な学びと捉えていた。個や協働は、子どもの「学びの必然性」の中に位置づく「学びの手段」となることを改めて学ぶことができた。単元を通して学習に取り組むことは実践してきたが、結局は毎時間、「こうするよ」と知識や方法を示していたため、子どもが自ら進んで学ぶことはできていなかった。単元のゴールを示して、そこを目指すまでにどのように、何をやっていくのか、子どもたちに委ねることも必要だと学んだ。その際に、単元の始めに、どのように教材と出会わせるか、どのように子どもの「問い」を引き出せるか、学びたくなるしかけをいかにするかなど教材研究をしていく。また、個と協働が往還することで、子どもの学びが深まっていたと感じたので「個別最適な学び」と「協働的な学び」が充実する授業となるように、今回の研修で学んだことを生かし、さらなる研修を積んでいきたい。